

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 8



サトウタツヤ@立命館大学文学部心理学専攻

福島・ふくしま・Fukushima (2)

福島訪問 2012.11.3 11.05

はじめに

歴史の機能とは何か。歴史には物語の機能があり、制約はあるものの、様々な出来事を「つなぐ」機能を果たすものだと言える。もし、出来事をつながないのであれば、それは単なる出来事の羅列であり、それは歴史とは言えない。そして歴史研究のもう一つの機能として、再（評価）がある。これは異なる文脈からの再評価という意味で捉えることもできる。物事の意味は文脈によって多様に変化する。過去の出来事もまた、後続のどのような文脈に位置づけるか、あるいは、後にどのようなことが起きるかによってその意味が変わってくる。

卑近な例で恐縮であるが、筆者は立命館大学に奉職する前は福島大学の教員(1994-2001)であった。このことは、筆者にとって前歴の一つにすぎなかったが、2011年の東日本大震災（とその後の放射能汚染）によって、大きく意味が変わった。東日本大震災という事実が、それ以前の出来事である筆者の福島大学在籍という事実を変更することは不可能であるが、個人にとっての意味づけは大きく異なることになったし、周りの見方も変わった。そしてまた、福島大学に在職していたということの意味が現在の筆者の生き方を多少なりとも変えている。学生と共に復興のために少しでも役立ちたいと考えている。

2012年6月の訪問は第10号で紹介した。9月にも訪問したが、そのことはまたいつか書くことにして、11月初旬の訪問について書いてみたい。

今回、研究員・学生・院生と10人規模で福島に出かけた。勝手に言っているのだし、場合によっては飛び込みに近い形で訪れた場所もあった。しかし「来る」ことについて、私

たちが「行ったら迷惑ではないか」などと躊躇していたのは全くの杞憂だった。

今回は、学部生の黒田絢子さんを中心とするサトゼミ生が、福島県の情報発信事業「いいね！ふくしま」に採択されたため、その取材をかねて、福島県に出かけた。前回、前々回は浜通り（海岸地域）に足を伸ばしたが、今回は福島県の魅力をワイドに知ってもらうため、中通りの福島市訪問を中心にしつつ、会津地方を訪れた。福島県は、会津、県庁所在地の福島市がある中通り、そして浜通りの3つの地域に分かれており、それぞれ、風土と魅力が異なっている。

2012年11月3日

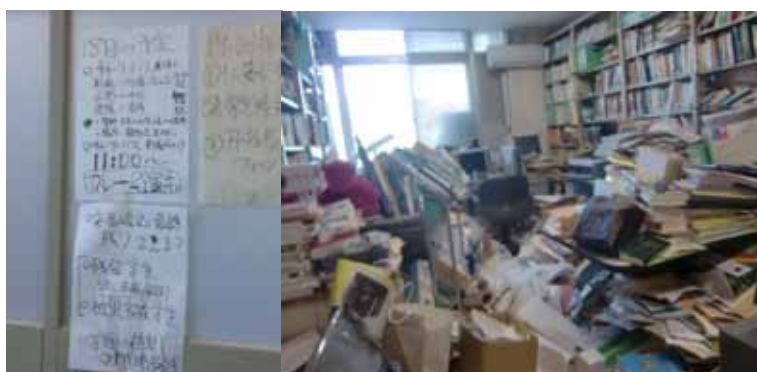
この日は福島大学の学園祭の日だった。誰にアポをとったわけではないが、学生委員とか学部長（福島大学では学類長と呼ぶ）はいるだろう、と勝手に考えて突撃。案の定、多くの元同僚に会えた。また、学生達の突然かつぶしつげな質問にも答えてくれた。



行政政策学類長・辻みどり先生は当日のことを語ってくれた。



地震直後、まず重要になったのは水の確保。また、学生の安全確認。幸いなことに福島大学学生に震災による犠牲者はいなかった。次に、放射能の問題が明らかになったときに、学生を自宅に戻すかどうか、ということが問題になった。国が「放射能は大丈夫だ」と言っているのに大学が学生を福島から出すなんておかしいではないか、それは放射能が危ないって言っているのと同じだからやめるべき、という反対論があったという。これについては、結局、帰りたがっている学生を大学が支援するのは人道にもかなっているということで一件落着となった。この件に限らず、安全・安心をめぐる見解の違いは、大学のみならず多くの人たちにとって非常に重要であるにもかかわらず、というか、重要な問題であるからこそ、複雑な影を落としているとのことである。さて、いくつか、当時の様子を示すものが、動態保存の形で残っているので写真に収めさせてもらった。写真左は、2011年3月の張り紙である。教員たちが、様々な手配をしていたことを示すものである。写真右は、とある方の、研究室。2011年3月11日大震災後の様子。行政政策学類棟の7階の部屋だそうです。



佐々木先生の部屋を訪ねたら、学生委員で待機とのことでお話を伺えた。



福島には、人がいない、子どもが遊べないと思われているが、メディアの情報に影響を受けているのではないか。たとえば、2012年の9/11にNHKが特番を放送した際、子どもが遊べない公園を映していた。子どもにもインタビューしていたのだけれど、その子も「外で遊べない」というような答えをしていた。そういう答えをした子どもがいたのは事実だろうが、放映されている実際にその公園に行ってみると、子どもが野球をしていたりする。

次に、やけに親しげな鮮魚商さんが来た、と思ったら元同僚の塩谷先生でした。



次は千葉先生と修士課程一年生の佐藤くん。佐藤くんは2012年4月から福島に来たとのこと。Rのマーク入りのチョコレートをおみやげに差し上げました。



家族がバラバラになっていることの複雑さを様々な角度から語ってくれました。

11月3日は土湯温泉に宿泊。向瀧旅館。11月1日に再オープン。つまり、震災の被害を復旧するのにそれだけの時間がかかったということ。

11月4日



旅館の前で記念写真を撮り、五色沼を經由して喜多方へ。今回の目的は福島の良いさを伝えるということも重要なので、裏磐梯という観光ルートを移動して、景色の美しさを実感し、それを伝えることにした。



この景色。これが福島である。

さて、喜多方、と言えばラーメンなので、もちろん食べた。



その後、お土産屋さんも営む漆器店、木之本漆器店へ。何を隠そう、ここは私の母の実家、つまり「おばあちゃんち」なのである。現在の当主は私にとってイトコにあたる遠藤久美さん。孫がいるとは思えない！



久美ちゃん（と幼い頃は呼んでいた）は、「一番大きく変わったことと言えば、住んでいるひとが2つに分かれたこと」だと感じているという。助けが必要な人／助けたい人という二分法、あるいは、ここから逃げなきゃいけないという人／この場に残ってがんばっていかなくちゃという人、の二分法が立ち現れたというのである。

喜多方市は、震源からも原子力発電所からも遠かったのだが、もちろん、様々な影響を受けている。6000人の方が避難してきているとのことである。地震直後、とにかく店を開けていたそうである。店を開けていることによって、多くの人が、止まり木のよ

うに木之本漆器店を訪れてきてくれたとのことである。実際に、商売になったのかといえはなっていないのだが、店を開けていたために、この店で一息ついていった方々がいたし、後日再び訪れてくれた人もいた。それで良かったと思う。

放射能について、恐れているわけではないが、やはり情報が少ないと思う。チェルノブイリの事故など誰もが知っているのだから、そこから得られたこと得られなかったことなどを丁寧に説明してほしいし、それがなくて、疑心暗鬼になりがちのところはある。喜多方市は修学旅行生が多かったのだが、去年はゼロになった。裏磐梯地方は実際に放射能の数値が低いとは言えない以上、仕方無いのか、と思う面もある。そういう意味で、福島を経済的打撃は、もしあるとしても、どこまでが風評被害で、どこからか実害なのかわからない、という気持ちもある。

ただ、外の人が思うほど、悲壮感があるわけではない。現在来ていただいている方々がもう一度来たいと思ってもらえるように、努力すべきだとは思う。

安全論者もいれば非・安全論者もいるわけで、結局どっちを信じるかは自分次第である
これは全てのことにいえるし、風評被害の問題もそうであると考え

喜多方から福島市に戻って来て向かったのは - これまでも何度か訪れている - 高橋果樹園の高橋さん。ふくしま土壌クラブとして活動するなど、地元の農家としてできることをやる、という姿勢に貫かれている。奥様は知る人ぞ知る、元「ミス・ピーチ」。お二人の真摯な姿勢には常に頭が下がる思いである。

高橋さんは、実は色々なことをやってきた。しかし、除染などは、一生懸命やれば、そんなに汚染されているのか、と思われてしまう側面もあり、複雑だとおっしゃっていた。本当に真摯に色々なことをやってきた。その努力が結果に表れてきているという自信もうかがえた。「福島の果物のおいしさをアピールする」ということが大事だというのが今の心境だそうである。

高橋果樹園の努力については、いつか、きちりと、文章にまとめて皆様にお伝えしたいが、慎重に書く必要があるので、時間が必要である。



夕方は福島大学の元同僚たちと軽く宴会。福島大学時代の大学院の教え子の鈴木実氏、立命館大学元ゼミ生の日高君（福島県立医大助手）も参加してくれました。元々は縁もゆかりもなかった二人が福島で知り合いになってくれる、というのうれしい。教師をやっていて、幸せな気分になれることのひとつである。

11月5日

11月5日は、福島民報社を訪れ、社内にある財団法人 福島民報厚生文化事業団事業団を通じて寄付を行った。今回の寄付は、「立命館大学・応用社会心理学受講者学生有志＋研究部職員有志」の名前で行いました。5名がその代表として写真に収まり、翌々日の福島民報の新聞紙面を飾りました。

ちなみに、福島には地方新聞が二紙あるのですが、それは福島民報と福島民友。福島新聞というような名前ではありません。明治時代における自由民権運動発祥にふさわしく、新聞に「民」の字が使われているのでしょう。



その後、松川にある避難所へ。ほぼ飛び込みに近かったが、大歓迎してくれた。



おわりに

今回も、また、いろんな言葉に出会った。

「おおサトウタツヤか。よく来た。でも、来るのが遅いじゃないか！」 と言ったのは福島大学の小島先生。何も言わずに、顔を見るなり、いきなり、である。しかし、震災後、一年半後、ということが前提になっている。

「ちょこっとでもいいから、みなさんに福島に来て欲しい。何もお買い求めいただかなくても、みなさんが来てくれている、ということが自信になる」とは 土湯温泉 向瀧 支配人氏。

「こうやって皆さんに関心をもってもらって、来てもらえるのが、うれしいです」と言ったのは福島民報記者氏。

「一度来てくれるのもうれしいけれど、それっきりの人たちよりも、何度も来てくれる人たちとの関係は、また別のもの」と言ってくれたのは高橋果樹園の経営者 氏

「また、いつでも来てくださいね」と送り出してくれたのは、川内村松川避難所の管理人 氏

福島を、可能な限り繰り返し、訪れること。そして、その時、その時の福島の様子を伝えること。おいしい福島の名産品を味わってもらうこと。今できることはそうしたことだけなのかもしれない。

というわけで、私たちは、立命館大学の学園祭での「いいね！ふくしま」展示を行った。福島の人たちの写真と、高橋果樹園のリンゴジュースである。

